

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 113 号

平成23年9月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」より（4）

モーク先生をしのびて

栗野政夫

手許にようやく探し出した拙い詩稿がある。これは13年前先生の来朝伝道35年の記念として先生に捧げた「黙示録の母」という幼い拙い詩である。忘れかけていた昔の思い出を切々と記してあるので、その一部を再録してみたい。

黙示録の母

小さい門の傍に（註＝宣教師館）

見上げるような高い欒（けやき）の木があった。

何時も午後の陽が温く

その太い幹に映っていた。

雨の日にはしとどに濡れそぼち

風の日には梢が空まで届きそうになり

秋ともなれば

夕陽をちぎるように

黄色い一葉一葉がとび散っていった。

フラム ツー ツー シックス
「2時から6時まで」

ツマロウ マンデー アフターヌーン
「明日月曜日の午後」

これがその時間なのだ
聖日の朝毎に必ず
モーク先生から申される

インヴィテーション
「招待のことば」

ブリースカム ツー マイハウス
「どうぞわたしの館へ来て下さい」

学生達は、いつも其の時間に
独り独り
一途な気持で
指ヶ谷の坂を馳せ上って
先生の
古ぼけた茶色の木造館の
ドア
扉を叩いたものだ。

学生達は、先生の客間で

聖書を読み、聖歌を歌い、
煩悶のある者は煩悶をきいてもらったり
疑問のある者は納得ゆくまで討論したり
そして涙で浄められる
祈りの時間を持つのであった。

先生はよく
白い服を着て居られた
若く美しく清らかに
そして何時も静かであった。

先生は深く信じ、神に従う人だった
いつもいつも祈って居られた。
祈りと伝道と
静かに謙虚な日々の実践
それが生活であり、立証であった。

「キリストは再び来り給う」
よく、こう説かれた。

白山の丘に30余年
先生の祈の生活がつがつづいている。
若く美しかった先生の
髪は既に既に白く
背も少々丸くなった。

学生達は、櫛と古い客間の
懐かしい思い出の中に
信仰の息吹きをふき込まれて
それぞれ日本の実社会へ
散って行ったが (後略)

結び (追記)
頭が薄くなり白髪になった学生達の
臉に永く残る映像

「今は静かに眠り給う
櫛の木の下の
黙示録の母、モーク先生」

(九州ライオン油脂株式会社取締役)

モーク先生との出会い

石館守三

初めて白山教会のミス・モークのバイブル・クラスに出席したのは、1923年(大正11年)の5月であったと思う。その動機は同志会(西片町10番地にある東大キリスト教学生寮)に入寮したばかりの時、先輩の小西芳之助(当時3学年)氏に紹介されて行った。当時のメンバーには、故広野氏、篠崎氏は先輩格に、若いところでは藤田昌直、長谷川進一君、故天野君らが出席した時代である。私としては仙台の高校から出て来たばかりのしかもキリスト教に初めて接した時代であったのでモーク先生の英語はさっぱりわからずぼんやり聞いていた程度であった。しかし、モーク先生の態度と愛情に心ひかれ、通っているうちにキリスト教の本質に少しずつ触れていったように思う。日曜日の朝はバイブル・クラスに出たあと急いで大手町の内村鑑三先生のイエス伝の研究に大正12年9月の関東大震災まで通ったのであった。

私にキリスト教の手ほどきをしてくれたのはモーク先生で、内村鑑三先生はその後の骨を与えてくれた恩人である。

大正13年春、決心して、白山教会で万木牧師によって受洗したとき、モーク先生は非常に喜んでくれた。

大正14年春、卒業後、本郷の同志会を去ってから、柏木の聖書研究会に通っていたので、白山教会とバイブル・クラスに足が遠くなった。

私にとって教会に対する反逆時代と空白の時がしばらく続いた。昭和 13 年欧米の留学を終えて帰って来た頃、高円寺の家にモーク先生と藤田先生が 2 度位訪ねて教会に来るように勧誘されたことがある。私も発心して昭和 15 年の頃から再び白山教会に出席しバイブル・クラスにも OB として関係をもつようになった。

国内の風潮は反キリスト教的に傾き、軍国主義が台頭し初め、日本の教会は寂寥の途をたどる時期になる。私はかかる時期にこそキリスト者の義務を果たすべきと痛感し、前より教会の仕事に熱心にならざるをえなかった。

昭和 18 年、モーク先生もキャンプに隔離され、教会は少数の人々によってかろうじて運営される最悪の事態になった。

日本を愛し、日本のために一生を捧げんとしたモーク先生は、帰米を肯んぜず毅然としてとどまり、ひたすら日本のために祈ったことであろう。

昭和 20 年 8 月、悲劇的な終戦の時がついに来た。国民の大部分はそのなすところを知らず、右往左往の有様である。軍はなお山野によって占領軍に抵抗するという気構えもあり、進駐する米軍によっていかなる事態が突発するかもしれない空気であった。私と藤田牧師は、早速モーク先生のキャンプを訪ね、この際、先生がなおとどまって不測の事態に対処し、キリスト者としてのなすべきことに協力して下さるよう懇請したのであった。

先生の答えは、何の躊躇もなく、私を必要とするなら今こそ福音のためにとどまりましょと、着るものもなくしかも長いキャンプ生活に衰えた体の先生が、なお 1 年間とどまる決心をされたのは、忘れることのできない私の感激であった。

終戦後、丸 1 カ年、焼け残った私の家の 1 室に不自由な生活をしてながら、日曜日は欠かさず聖書の講義を続けられたのであった。

伝道者としてのモーク先生

人生を送るに二つの道のあり方がある。一つは、人生をできるだけ自己の計画にそって歩まんとする、よき意味においても自己の願望を満たさんとする生き方である。

他は全く自己の欲求を放棄して神の道にこれ従うことを求める生き方である。真のキリスト者の生き方、即ち信仰の人生は後者の生き方であることは聖書にある預言者と人物の一生がそれを証する。...ペテロ、パウロ、ヨハネの生涯も、ルーテル、ウェスレーなど偉大なキリスト者の伝道者の生涯もそうであり、そうあらねばならなかった。

一見無定見に見え、一時は失意の人となり自分の計画が破れ、自己の希望が満たされない不幸な生涯を送ったように見える。しかしかかる人生のみが永遠に価値あるものであることを聖書が教えていることは注目すべきことである。

第 1 にモーク先生の生涯もまたかかる人生の典型的なものでなかったか。彼女は年齢 28 歳で、しかも極めて弱い体格の持ち主で、自他ともに不可能と思われた遠い異国の伝道に遣わされた。時は大正の初期でそれは彼女には想像を絶した難事業であったろう。彼女は自己の意志でなく、主の命として敢然とこれに従ったのであった。

モーク先生は伝道に際し、自己の意志や解釈を行なうことを常に避け、聖書に文字どおり忠実ならんことをモットーとした。彼女は神学を口にしなかったし、聖書のうち特に四福音書をくり返し講読するのが先生の特徴であった。

彼女はほんとうに人を愛し、日本を愛した。愛は妬まず、誇らず、寛容を身をもって実行された。

終戦直後、衣食が極度に欠乏を告げたとき、多くの気の毒な人々がモーク先生を訪れた。彼女は乞われるままに無差別に与えていた。私は僭越にも先生に忠告めいたことを言ったことがある。先生言下に曰く「乞われるものはすべて与えよとキリストが言っています。私にはその結果の判断はわかりません。ただ主のみ言葉に従うばか

りです。」私は肝に銘じて恥いった。

彼女はキャンプ生活中、焼け出され転々と居を変えた。そして焼夷弾や爆弾が身边を見舞ったときのこと、彼女は防空壕に入ることを好まず「爆弾が日本人の上にくるかわりに自分の上に落ちるように」と願ったと一人の刑事がわれわれに驚異の目を見張って話してくれたのも忘れえぬエピソードである。

そしてモーク先生は日本を去るに臨んで、何の目に見ゆる記念物を残すことも、勲章をもらうことも意に介しなかった。そして飄然と日本を去ったのである。

彼女が日本に残したものは弟子の心の中に信仰の種とその模範とであった。そして多くの実を結ぶ日を祈りつつ。

(東京大学名誉教授)

モーク先生の思い出

石館光子

モーク先生はついに天に召されました。例え遠くアメリカに帰られても直ぐ近くにいてくださるように、いつも心の中にあの清い美しい笑顔のモーク先生は生きて私たちを支えていてくださったのでした。...先生からいただいたお便りの数々は私にとって大切な宝になりました。これほどまでに東洋を愛し尊いご生涯をただただ祈りとおしていてくださった先生のお姿は私の心の中に今も生きておられます。そして決して消えることはないでしょう。

私どもが疎開先の秋田からやっとのことで高円寺の家にたどりついた時、先生は白山教会が焼けてしまったので、藤田先生ご一家と一緒にこの家に収容所から引き揚げてきておられました。そして母が子供たちを迎えるように喜んでくださいました。黒い色のコッペパンを薄く切ってその上にチョコレートのようなものをかけて早速ご自分でお盆に並べ長いローカを私たちの部屋に運んでくださいま

した。その時のうれしそうな顔もそのパンのおいしかったことも昨日のようになつかしく思い出されます。

終戦後末っ子の光ちゃんが3歳の頃、病気になり静かに寝かせておこなくにはならない時がありました。ちょっと用事で私が傍にいない時など、一人ぼっちな光三の部屋に「光ちゃんも一人ぼっちな、モーク先生も一人ぼっちなよ」と、いつの間にか光三の傍にすわってお守をしてくださったこともいくたびだったことでしょう。...

いつかお便りに家族の一人一人のことを書きました。そして6尺ぐらいも大きくなった光ちゃんが、一人ベッドの上に座って寝る前の祈りをしている姿を見た時の私の喜びをお知らせした時、先生は喜んで喜んで直ぐお返事を下さいました。

「家族のニュースをたくさん知らせてくださったお便りと素晴らしい写真をありがとうございました。私はあなた方ご家族の写真はすべて特別の封筒に入れてとってあり、しばしばそれを取り出してみます。一人一人を見つめます。特に光三！わたしはお宅ですごした多くの楽しかった日々（many happy days）を決して忘れることはできません。私たちの心は、キリストと彼を信ずる者の大きな家族（His great Family of Believers）と真に結ばれています！私は私たちが再びすぐに会えるように感じています。

（石館守三氏夫人）

モーク先生の偉大な影響力

一瀬智司

モーク先生が天に召されてから早くも半年が経過しようとし、そしてここにモーク先生を記念して文集の作成が行なわれようとしている。モーク先生ははでなことがお嫌いだという。それにもかかわらず、なぜ多くの人々が先生を慕い、先生を追悼し、先生のありし

日にも増して私たちの身近に感ずるのであろうか。...まったくいつもにこやかな笑顔をされ、温和な物腰で私どもに接せられた先生は、先生ご自身がイエス・キリストの再来、生ける神かと思われるほどの存在だったのである。

私どもの疑問はどうしてそのような人になられたのか。生まれながらにしてそうなのか、それともキリスト教信仰によってであるかということである。それはいうまでもなく信仰によってであろう。しかもいいかげんな信仰でなく、徹底した信仰によるためであるといえることができる。それは決して、ご自分で自己の意思によってこうしようとしてしたことではなく、神のお召しのままに、ただひたすらみ旨にしたがっただけだとお答えになるであろう。その結果が、普通の人々の予想もできない大きな仕事をなしとげることになったのである。何と偉大な力ではないか、信仰の力は。

私が初めてモーク先生にお会いしたのは、終戦後間もなく、今の教会の幼稚園になっているコンセットハットの会堂か、あるいはこの間おいしいことに焼けてしまったが、モーク先生がお住まいになっていた教会の隣のお家のどちらかだったと思う。英語のバイブルクラスがあるからいらっしゃいといわれた。そしてモーク先生の英語のお話をきき、それを少しでも理解しようと思いつようになったこと、また、今でこそアメリカ人やイギリス人に私たちは好意をもつけれど、戦争中は鬼畜米英などといい、英語も敵性語として一般から反感をもたれた時代に、軍部・政府の強引なやり方に批判的な気持ちをもっていた私たちは、あの当時のB29や艦載機による空襲の下に、ある海軍航空基地の防空壕の傍にいて、つくづく日本は米英両国を見損っていたのではないかとの気持ちにさせられていたので、戦後先生にお会いした時の、モーク先生の態度、ものごしは、一も二もなく私を引きつけてしまうに十分だったのである。

しかもモーク先生はどんな人に対してもまったく同じようにのぞまれ、そしてだれもが一度会っただけで、10年の知己のような思い

にさせられてしまうという、ふしぎな魅力をもっておいでになったのである。...

私の知っているモーク先生は決して熱情にもえるような烈しい信仰ではなく、いつお会いしても実に坦々とした、それで実に温かく包容力のある信仰であったようにお見受けする。一口に 40 年、50 年というが、生涯を通じての信仰の火を燃やしつづけるということとはなまやさしいことでできることではない。一時に興奮したり、熱狂的になること必ずしも信仰の強さを意味しない。かえって人目にはあまりふれず地味であっても、そこに深い信仰と固い献身を見出すことができるのである。

その意味で、私どもの教会、小石川白山教会は、いろいろな面でモーク先生を継ぎ、私どもに生きたこの世にある証人として外国人でありながら、日本人とその教会のためにお尽くし下さっているもう一人の宣教師エルマー先生を覚えたい。私はモーク先生の生前を知っておられる方はもとよりのこと、モーク先生をご存じない方は、今おられるエルマー先生によってモーク先生をしのんでいただけと思うからである。なぜならばイエス・キリストにとらえられた者はそこに必ず共通のものを見出すことができるし、この二人の先生にはまた非常に似た聖霊の宿りを覚えるからである。...

(国際基督大学教授)

モーク先生の思い出

入江勇起男

私は終戦を海軍経理学校の文官教官として奈良県の橿原で迎え、その秋今の教育大学に転任。いうまでもなく東京はあたり一面見渡す限りるいるいたる廃墟。どこにも住むところがありませんので、大学の焼け残りの西館 3 階の一研究室に泊っておりました。...

そのころのことです。わたしが西館から外に出ましたら、焼け跡のあいだを歩いて西洋人らしい婦人が近づいてくるのに気がつきました。西洋人にしては妙にみすぼらしく、あたりの廃墟とあまり見わけもつかない灰色の、それも、なりふりかまわないという服装でした。擦れ違いにふと、見るとどこか見覚えがある。モーク先生ではないか！あの若々しさはどこにもなく、そこに見受けられるのは日本人に少しもひげをとらぬやつれた色のわるい老婦人だったので。しかし、あのゲーテのような端麗なお顔立ちはまごうかたないモーク先生である。ぼくは驚いて、失礼ですがモーク先生ではありませんか、とことばをかけた。「そうです。あなたは？」と、にっこりなさって、じっと見つめられるその美しいまなざし。なつかしさがこみあげてきました。しかし、それと同時に恥ずかしさが心を滅入らせるのをどうすることもできませんでした。それから2人が立話で、何といったか覚えておりません。ただはっきり覚えておりますことは、戦争中どうしておいでになったかたずねましたところ、ずっと日本にいました、愛する日本のかたがたといっしょに死のうと思って日本にずっとおりました、というお答えです。これには驚きました。私は感激して、わたしどもは実に恐ろしい罪悪を犯してしまいました、と、言うに言われない気持ちでこのおいたわしいお姿に向かってあやまりました。すると、先生のお答えが意外なのです。私はそのおことばに完全に圧倒されたと言わなければなりません。それは、「ノウ、ザ・ブレイム、イズ・オン・ボウス・サイズ！」（いいえ、どちらもいけないのです！）というのです。その静かなお声、その毅然たる態度、その深い悲しみの表情！わたくしはそこに初めてキリストのいのちを感じました。...

確かにイエスの精神は生きており、万人のまごころに訴えずにおかないことを、わたくしはモーク先生によってじかに感得させられました。
(東京教育大学教授)